

未来の
文化
文明論

科学・技術 文明の再生

むらかみ よういちろう
村上陽一郎
(国文学研究館教授)

「文明」という言葉

「文明」という言葉のヨーロッパ語である (civilization) の類語は、すべて「都市化」という意味を含んだ言葉として十八世紀に成立した。ここで「都市」に対立させられているのは、「野蛮な自然」である。「野蛮な」ままに、言い換えれば、「人間の手が入らぬ」ままに、放置された自然こそ、文明の対極にあるものである、という発想が根底にあって初めて成り立つのが「文明」である。

この概念が十八世紀ヨーロッパに誕生した、ということとは示唆的である。言うまでもなく、十八世紀は「啓蒙」の時代であり、神と人を切った人間が、自らの理性のみを信頼して行動することに自信を持ち始めた時代である。神の創造になる自然である限り、それは人間の意のままに扱うべくもないが、その神を翻上げし、神から自立した人間が神抜きですべてを取り仕切るとすれば、人間に都合の悪い、能率の悪い、不経済な自然は、

人間に都合のよいように、如何しようにも、人間が手を入れ、改造し、管理すべき対象として浮かび上がる。そこに「文明」が成り立つ根拠があった。

かくして、「文明」は、自然を攻撃の対象として設定したのだ。た。「文明」とはまず自然に対する攻撃的姿勢を備えたものとして理解できる。人間が自然に対して攻撃的姿勢をとった出発点は、農耕であったろう。灌漑、品種改良、単品種濃厚栽培。いずれも、人間が自然に手を入れて初めて可能になる事態である。それゆえ「文化」(それは言うまでもなく「農耕」に由来する)は「文明」となりうる基礎資格を具備していることになる。しかし、すべての文化が「文明」と呼ばれるわけではない。

文化が「文明」となりうるもう一つの必要条件は、それが他の文化に示す攻撃性である。一つの文化が、他の諸文化を屈服させ、自らの文化のなかに併呑するだけの意志と社会的権力装置(例えば技術、軍事力、警察力、教育制度など)を用意し、実際にそれらを駆使して周辺の諸文化を自らの版図のなかに収め、それを相当の期間にわたって実行したとき、それを「文明」と呼ぶ。

その意味で、「文明」とは二つの攻撃性、支配性を備えた文化である、という定義が可能となるだろう。

科学・技術と文明

このように文明を定義するとすれば、近代ヨーロッパに生まれた近代的な科学・技術が、こうした攻撃性を支える極めて強力な道具となったことは、当然であった。とりわけ第一の攻撃性に関しては、従来の農耕文化とその延長としての諸文明に比較して、図抜けた力を提供したし、また今日でも提供し続けている。近代ヨーロッパ文化では、「自然であること」と「未開で

アフリカにおける植民地経営(1900年ごろ)。18世紀以降、欧州列強国は競ってアフリカの植民地経営に乗り出した。「普遍的」という名のもとで、他の文化圏の人々の思考様式まで変えさせた近代ヨーロッパ文化はまさに「文明」の名に相応しい。

写真提供 キリシタンプレス(以下同)



あること」とは同義に扱われ、「自然であること」はほとんど「悪」として見なされるようになつた。人爲によって、人間の都合に合わせて、どれだけ自然を改変できるか、という問いに挑戦を続けてきたのが近代ヨーロッパ文化であり、それを支えてきたのが、そのなかで生まれて育てられてきた近代技術、およびそれに輪転を提供した近代科学だった。

しかも、それだけの力を持つことは、第二の攻撃性、すなわち他の諸文化に対する攻撃性にも格好の武器となつた。十八世紀以降のヨーロッパの植民地経営は言わずもがな、そうした直接的支配だけでなく、近代ヨーロッパの科学・技術は「普遍的」という名のもとで、他の文化圏の人間の思考様式をさえ、攻撃的に改変させ、支配しようとしてきた。その意味で、近代ヨーロッパ文化は、まさしく「文明」の名にもっとも相応しい。

第二の自然の支配

ところで、興味深いのは、このような近代ヨーロッパ文明にあつては、人間の自然支配を貫徹することが、一義的な課題になるが、そのためには、人間は自然から自立し、自然と対峙することが求められる。自然に隷属・従属し、自然に埋没してい

る状態は「未開」として厳しく斥けられる。

しかし、どれほど人間が自然から独立したとしても、その自立・独立は完全には果たされ得ないこともまた自明である。何故なら、人間もまた自然のなかの他の生物と同じ側面をもっておりそれを捨てることは生きることと捨てることに他ならないからである。生きる以上人間は生殖、摂食、睡眠、闘争などの「本能的」と言われる衝動を、自らのうちに抱え込んでいる。

この言わば「内なる自然」は、第二の自然とも呼ばれ、近代ヨーロッパ文明のなかでは、この自然もまた克服すべき対象として設定され、少なくとも人爲が介入して、それを管理することが重要な課題と考えられるに至つた。

人間は「第二の自然」とも対峙し、それを自ら管理する。それは確かに「倫理」である。第二の自然の命ずるままに行動することとは「野蛮」であり、「未開」である。それを理性によって支配し管理する。それが如何にして可能か。かつて倫理は神に発した。神が人間に与えた命令として倫理を理解しておけば、それで倫理は十分であつた。しかし、今や神を棚上げした近代ヨーロッパにおいては、倫理もまた人間に発するものでなければならなくなつた。人間自身に由来する根拠に基づいて、人間は第二の自然を管理することが求められたのである。十八世紀から十九世紀にかけて、ヨーロッパの近代哲学者たちが、一様に倫理學の構築を課題の一つとしたことは、決して偶然ではない。

欲望の自創と解放

しかし、このような近代ヨーロッパの動きのなかには、一つの矛盾が含まれていたことは、見逃せない点である。人間自身の理性を唯一の根拠として、倫理を構築する。その際に、神すなわちキリスト教に由来する根拠はもはや採用できない。そして、ヨーロッパの社会のなかに、倫理的基準として永年機能し

てきたのが、こうした宗教的な背景に基づくものである以上は、そうした宗教が形成してきた伝統的、社会習俗的制度のいっさいを棄てるのが、ほとんど論理的に要求される。確かに「近代化」という理念の一部に、因習的、制度的に人間を束縛してきたものから、人間を解放することが含まれていたのも、再び偶然ではないのである。

伝統や習俗や因習など（それらの柱として、ヨーロッパの場合にはキリスト教が存在していた）からの解放、そうしたなかには暗黙に含まれてきた価値の廃棄、それがヨーロッパ近代においてなすべき課題となった。

先に、十八、十九世紀のヨーロッパの哲学者たちは、人間自身に発する倫理を建設しようと試みた、と書いたが、その一方では、伝統的、因習的に人間の欲望の解放を阻み、束縛してきたもののいっさいから離脱させる努力が、それと並行して積み重ねられたことになる。

言わば欲望の自創と解放という、二つの異なるベクトルを、同時に抱え込んだヨーロッパ近代は、それだけで、重大なディレンマを内包していたことになる。

近代文明のイデオロギー

そこにディレンマが存在したという事実が残るものの、近代文明の展開の実際の歴史的経緯は、むしろ、このディレンマの一方の角のみ、すなわち欲望を束縛してきた因習からの解放のみを、強く願い上げてきたことを示している。

そのことは、近代ヨーロッパ社会が、「もの」に対する人間の欲望の充足を契機として抱える資本主義的な経済体制をとって来たことと無関係ではない。もちろん、論理的には、近代ヨーロッパ文明のとるべき選択肢として、資本主義体制以外の可能性もなかったわけではなく、したがって、近代ヨーロッパ文明

のイデオロギーが、そのまま資本主義体制の選択と直接結びついているとは言えないかもしれない。しかし、ここでも実際の歴史的展開のなかでは、ヨーロッパ近代文明はその選択を行なったのであり、その内実は、資本主義体制と離れ難く結託している。

そこでは社会の成員たる個人は、本来束縛されずに欲望の充足を求めるような行為主体として設定されている。「ホモ・エコノミクス」と呼ばれるのは、そうした人間の理念化された姿と云うべきだろう。

自らの欲望充足のために、より性能のよい財を、より廉価に手に入れることを目指して行動する個人が、そうした行動原理を、他者との利益の衝突を唯一の制御機構として、もっとも自由にもっとも合理的に、判断し、行動することが、資本主義体制を成り立たせる。他方、財の提供者は、そうした個人（通常「消費者」と呼ばれる）の行動様式を前提にしており、彼らの間の自由な競争のなかで、消費者の望みにもっとも合理的に対応するエージェンツが生き残っていく、という仕組みが用意されている。

ここでは、「消費者」と呼ばれる個人の欲望充足に対する「歯止め」の役割を果たすものは、原理的には存在しない。歯止めが存在しないばかりではない。むしろ逆の構造が現われてくる。例えば、クローン技術を考えてみよう。クローン技術がもっとも人間に適用される可能性の高いのは、不妊治療の場面である。胚を簡単にするため、単純化したパターンで考えてみよう。夫が無精子症である場合、妻の卵を採取して除核する。夫の然るべき体細胞から細胞質を取り出して、除核した卵へ移植させ、たうで妻の子宮に着床させる。もちろんこの操作が成功して子どもが生まれたとすれば、遺伝的には、その子どもは夫のクローンであって、妻の側の遺伝形質はいっさい受け継いでい

人工授精によって誕生した赤ちゃんを見守るカップル。クローン技術がもっとも人間に適用される可能性の高いのは不妊治療の場面である。



い。しかし、それでも、この夫婦にとっては、他人を介在させないで得られた自分たちの子どもということになる。

これがさらに極端になると次のようなケースが考えられる。女性どうしの夫婦がいたとする。このカップルの一方の卵と他方の体細胞とを使って、彼らの「子ども」(体細胞を提供した側のクローンではあるが)を同じように造ることが可能になる。実際女性どうしの夫婦(アメリカではすでに法的に認められる事例が誕生している)にとつて、この技術は「福音」というべきかもしれない。

しかし、考えてみると、無精子症の夫婦、ましてや女性どうしの夫婦が、他人を介在させないで、自分たちの子どもを得る、というような欲望を持つこと自体は、もともと、およそ考慮の外にあったはずであつて、仮にそうした望みが彼らの心の隅をよぎったとしても、とても叶えられない馬鹿げた願ひとして、棄てられていたと考えられる。ところが、技術の発達とは、こうした「とても叶えられない馬鹿げた」望みや欲望さえも、可能にすることを約束し、人々の欲望を止めどなく増幅させ、肥大化させるという役割を果たしている。

つまり近代社会においては、技術は人間の欲望を充足する手

段であるばかりでなく、人間の欲望を無から造り出し、誘導する役割をも同時に果たしていることになる。

皮肉なことに、欲望の人間理性による自制を重要課題として引き受けつつ出発したはずのヨーロッパ近代文明ではあるが、その課題よりは、むしろ人間が如何に欲望を育み、如何にそれを充足させるか、という側面に多くの努力を割いてきたというのが実状のように思われる。

文明再生の可能性

こうした状況のなかで、人間の欲望の肥大化と、それを充足させようとする技術との間に、際限のない相互刺激が繰り返され、そこに文明そのものの危機もまたはつきりと見えてきた。財の生産のための資源・エネルギーの乱費、創り出した人工物の処理と、それによる環境の悪化、これらは、近代ヨーロッパ文明の積極的な側面が、そのまま負の側面とつながっていることを示している。つまり文明のイデオロギーそのものが必然的にもたらした危機ということができる。

言い換えれば、ヨーロッパ近代文明は、第一の攻撃性という点だけからでも、自己崩壊を誘導するのに十分なほど、発展し、力量を発揮したのである。

もし、この文明の再生の可能性があるとすれば、それだけの力量を持った文明自身が、自己の進む方向を自ら変更すること以外にはないだろう。

欲望の自制的機構を、文明のイデオロギーのなかに如何にして取り込むか、そしてそのメカニズムを如何にして実効あるものに活性化させるか、この課題こそ、二十一世紀に、ヨーロッパ近代文明が引き受けなければならないものであり、挑戦しなければならぬものだと思ふ。